

# 日本語授業における視聴覚的教授方法

木村宗男

視聴覚教育と言われるものは、二つに分けることでできる。一つは、視聴覚媒体が一定のカリキュラムによって、教材として構成されていて、授業はその媒体を主教材として進められるというもの。もう一つは、普通の教科書を使用する授業で、視聴覚媒体が補助的に利用される場合である。前者には、映画フィルム・VTRテープ・スライド・OHPトランスパレンシー・録音テープ・レコードなどが利用される。後者では、上記の媒体のほかに、より広汎な日常的教具も使われる。厳密な意味で視聴覚教育と呼ばれるのは前者の方であって、近年、盛んに研究が行われ、教材の開発も進んでいるので、将来は、技術の進歩につれて、大いに普及するであろうと思われる。それに対して、後者の方は視聴覚媒体を授業に補助的に利用するものであって、視聴覚教育というよりも、視聴覚的手段を取入れた授業とも言うべきであろう。この方法は簡便であるため、一般に広く行われている。しかし、簡便であるだけに、便宜的に、安易に行われているきらいがある。そこで、本講では、後者の視聴覚的手段を授業に取入れる場合について、筆者の体験を交えて述べてみようと思う。

## 1. 提示の場合

学習者の母語あるいは他の外国語を使わないで教える、いわゆる直接法による授業では、新出語の意味を教えるとき、実物・絵・写真などを見せるという方法に頼らざるを得ない。もっとも、課が進んでいくにつれて、既習の日本語を使って解説する、同意語を与る、あるいは例文を示すなど

の方法で、新出語を処理することが多くなっていくが、入門初期では、上にあげたような視覚的手段に頼るほかない。したがって、その段階で提出できる単語とえば、実物・絵・写真・身振り・動作などによって示すことのできる具体的なものに限られる。(動詞・助動詞も当然最初から出てくるけれども、これらは、単語としては提出されないで、文型によってそれぞれの用法が教えられる。)それゆえに、直接法用の教科書では、抽象的な意味を表わす単語——「授業・勉強・意味」などという語すら、入門初期に提出することはできない。そのような語を早くから教えようとすれば、どうしても対訳によって意味を与えなければならないので、多くの教科書が、新出語の対訳を載せている。そこで、このような教科書を使って教える場合には、視覚的手段を必要としないかと言うと、決してそうではない。上記のような教科書を使用する教育でも、提示の時から日本語で授業が進められるのである。それは、日本語の体系の知識のみを目標とするのではなく、日本語の運用能力の修得を目標とするので、提示の段階から日本語のみによる方が効果的であるという考えに基づくのである。この方法は、対訳を与えている(印刷の形によってであるが)ので、厳密な意味での直接法とは言えないが、対訳法とも言えない。しいて言えば、両者の長所を採った折衷法とでも言えようか。

このような方法による授業では、提示は次のようにして行われる。まず、具体的なものを表わす語の意味を視覚的手段に訴えて与える。次に、その語を含む文型を提示する。そのときも、視覚的手段が採られる。こうして文型を導入しておいて、さきの具体的意味の語を抽象的な単語に置き換えていく。具体例を示そう。「本・新聞・字・チョーク、ペン」などは既習、「読む・書く・勉強する・教える」が新出で、文型としては、「——を——ます」を提示するものとする。

(本をあけて目で行を追いながら)

「本を読みます。」

(同様に新聞を使って)

「新聞を読みます。」

(チョークを取り上げながら)

「チョークを取ります。」

(ペンを取り上げながら)

「ペンを取ります。」

(黒板にチョークで字を書きながら)

「字を書きます。」

このようにして、「――を――ます」という文型を視覚に訴えながら導入する。続いて、学習者自身に本・新聞・ペンなどを持たせて、上と同様に言わせる。それが言えれば、この文型を学習者が自分のものにしたことが分かる。あとは、対訳によって教えた「日本語・勉強する・教える」などを文型の中の語と置き換えていけばよい。

以上はほんの一例に過ぎないが、新しく提示される語と文型を、音声として耳で聞きながら、目では意味を理解することができる。さらに、学習者自身が、本・新聞・ペンなどを持って、同様の文を言うことによって、理解すると同時に、表現の練習へと進むことができる。しかも、母語を仲介としないで、理解と表現の練習ができるのは、視覚媒体を使うからである。

視覚媒体として使用されるものには、次のようなものがある。

## 2. 視覚媒体

### (1) 実物

教室内の備品、教室に持込み可能なもの、教師自身の体・身振り・動作など。

### (2) 模型

教室内に持込めないものは、模型を使用する。おもちゃにも利用できるものがある。季節外れの花や果物は造花やろう細工で代用できる。

### (3) 写真・スライド

模型よりも広範囲にわたる場合に使用できる。初心者でも間違いなく写せるカメラが普及しているので、写真を教育に利用することも以前より容易になったが、それでも、数多くの写真を撮影するのは、経済的・労力的に負担が大きい。そこで、グラフ・ポスター・カタログ・雑誌の口絵などを利用する。必要な部分を切抜いて、厚手の紙に張って使う。数枚の切抜きを張り合わせて、一つの情景を作り出すこともできる。

#### (4) 絵画・図

絵は、必要なものをなんでも描いて示すことができる。また対象を単純化し、強調して示すこともできるので、概念を与えることにおいては、上にあげたものよりも有利であるが、それには技術を要する。特に美術的であることを要しない。教室で黒板に必要な絵を素早く描くということは、教師に必要な能力である。略画の描き方を練習しておくとうい。略画事典などが参考になる。

### 3. 使用方法

名詞については、上位概念を与えようとして、下位概念のものを持ってきて失敗することがある。例えば、「花」とか「果物」とかは、数種類のもを併せ示さないと、花や果物の概念は与えられない。さくらの花は「さくらの花」であって、「花」ではない。「自動車」「飛行機」なども同様にむずかしい。これらは、まず下位分類によって、一つ一つの語を与え、それらを総称するものとして、上位概念を表わす語を教えるようにする。また、「家」という語を教えるのに、日本家屋の写真一枚を示すと、「日本の家」と受け止めかねない。以上のような場合は訳語を併用するとよい。

地名が出てきたら、必ず地図を使って、位置を確認させることが大切である。

形容詞では、形・色・状態など、視覚に訴えながら提示できるものが少なくないが、例えば、大小・高低・長短・広狭・深淺・輕重・遠近・明暗

などのように、対照的なものを同時に示して、比較によって教えないと理解できない。

動作によって動詞を示すときは、その動作に必要なモノを使ってしないと、単なる身振りになってしまう。身振りは、民族によって異なるものが多いので正しく理解されないことがある。「飛ぶ」「泳ぐ」という動詞を身振りで伝えるのは困難である。「飛ぶ」を教えるのに「跳ぶ」動作をすれば、誤解を生じる。これらは、むしろ絵や写真を使う方がよい。ただし、1枚の絵だけでは、「……している」という意味に解されるおそれがある。そこで、動作を始めようとする絵と動作を終えたところの絵を示し、完了形も同時に教えると、その動詞の意味が明確になる。例えば、「食べます」を表わすのに、食べている絵1枚では「食べています」になってしまう。人が食べ物を前に置いた絵と、食べてしまって皿が空になった絵とを示して、「——を食べます」「——を食べました」というようにする方がよい。

「行く」「帰る」は教室内で教師が動作で示しても、それは「歩く」と理解されるかも知れない。出発点から到着点までを点線と矢印で結び、その線の上を人が歩いている絵を示すことによって、「行く・帰る」を表わすことができる。「行く・来る」を対比するには、向う向きに歩いている人と、こちら向きに歩いている人とを対照して示す。遠近法によって、人の姿が遠く小さくなったものと、大きく近くなったものとを併用すればよりの確に表わすことができる。

動作を表わすには、映画やVTRのような、動きのある視覚媒体を使わなければならないと考える人があるかも知れないが、必ずしもそういうものを使わなければ動作が表わせないということはない。実際に使ってみると分かるのだが、むしろ静止した写真あるいは絵による方が、学習者に的確に伝えられることさえある。

数詞・助数詞は単に数を唱えて覚えさせたり、数字を読ませたりするのみではなく、(それも必要ではあるが)実際に物や人を数えてみせたり、数えさせたりしなければならない。それには、数えるモノを用意しなけ

ればならない。時刻・月日・曜日などを提示するときも、必ず時計の模型（文字盤だけでいい）やカレンダーの実物を使って教えることである。

#### 4. 自動詞・他動詞

日本語の自動詞の意味・用法を教えるのはなかなか難しい。学習者が苦勞して、「見える・見る、あく・あける、しまる・しめる」などと、自他の対応を丸暗記することができても、実際に使って教えなければ、用法は飲み込めない。ところが、ちょっとした道具を使って教えることによって、自動詞の意味・用法を確実に習得させることができるのである。

例を「見える・見る」に取ろう。「見る」は「――を――ます」の文型によって容易に教えることができるが、「見える」の方は単語として対訳を与えてもうまくいかない。では、どうするかと言うと、まず、赤・青・黄色などの色のセロハン紙を用意する。はじめに、白い紙を見せて、「どんな色ですか」と学習者にきくと、「白いです」と答える、次に、赤いセロハン紙を通して見させて、「赤く見えますか」ときくと、一瞬戸惑って、「赤く見えます」と答えるだろう。もし答えなかったら、「赤く見えます」と教えて言わせる。青いセロハンを通して見させて、同様にきくと、「青く見えます」と答える。このようにして、次々に学習者にセロハンを通して見させ、同じ質問を繰り返す、「見えます」を使って答えさせる。そこで、こんどはレンズを持たせて、細かい字を見させる。そして、「大きく見えますか」ときくと「大きく見えます」と答えてくれる。「見える」を単語として教える前に、学習者は、ちゃんと「見えます」を使って答えるから妙である。さらに、おもちゃの望遠鏡を渡して、遠くの方を見させ、「何が見えますか」ときくと、「何々が見えます」、「遠くに見えますか」、「近くに見えます」などの問答をする。このようにしてクラスを一巡するころには、完全に「見えます」の用法を会得する。

「聞こえる」を教えるには、小さなポケットラジオを使い、音量を大き

くしたり、小さく絞ったりして、「聞こえますか」「聞こえます」「聞こえません」を繰り返しながら、机のあいだを歩く。このようにして「見える・聞こえる」が使えるようになったとき、動詞に自動詞と他動詞の区別があること、自動詞には助詞「を」ではなくて、「が・は」が使われることを教える。「——を歩く」のようなものは別に教える。

「あく・しまる・あがる・さがる」などは少々工夫を要する。「あく」を教えるとき、教師がドアを自らあけて、「ドアがあきます」と言うのは、「あける」との違いは理解されまい。もともと、自動詞は、他の力が加えられないで、そのもの自体が動作することを意味するのであるから、教師が手を使ってあけておいて、「あきました」では、学習者は「あけました」との区別がつかなくなる。ここはどうしても、自発的に動作をする——少なくともそう見えるようなモノを使わなければならない。ふたが自動的にあき、自動的にしまる箱、そういった仕掛のあるものを見付けてくるか、自分で作るかしなければならぬ。筆者は、弾力性のある鋼鉄の針金とゴムひもを手ごろな箱に取付けて、留め金を外すとふたが自動的に開き、開いたふたが自動的にしまるようにした。この箱を使って、「あく・しまる」の演示をした上で、学習者に持たせて、同様に演示しながら「ふたがあきました」「ふたがしまります」などと言わせるのである。ふたが跳ねるように開くときの音と手に伝わる感触、そういったものが、「あく」という自動詞を感覚的に会得させるのではないかと思う。

「あがる・さがる」を会得させるときは、次のような工夫をした。まず30センチやらの細い棒（竹でも木でもいい）を使って、テンピンを作った。両端に浅い受け皿をひもでつるした。受け皿には、インスタント・コーヒーの大びんのふたがちょうどよかった。棒の中央にひもをつけて、手に持ち、受け皿に、重さの違う物を載せると、一方はあがり、他方はさがる。この場合、物をのせるのは人の手であるが、上がり・下がりするのは人の力によるのではない。このような物を学習者自身が使って、「あがる・さがる」ということばを使っているうちに、意味・用法は体験的に会得で

きるわけである。

なお、このテンピンを使って、「重ければ下がります」「軽ければ上がります」などと言って、条件の言い方の提示や練習をすることもできるなど、工夫をすれば、まだまだいろいろの場合に使えるのである。

自動詞には、自発的にする動作を表わすもののほかに、外からの働きかけによって、ある動作をする性質を持っていることを表わすものがある。ライターの火がつく、錠があくなどがそうである。ガスの切れたライターを渡して、「つけてください」と言うと、学習者は二、三回試みた上で、きまったように、「つけることができません。」と言う。錠に合わないカギを渡して「あけてください」と言うと、これも必ずと言っていいくらい「あけることができません」と言うのである。これらはそれぞれ、「つきません」「あきません」と言うべきであると教える。このようなとき、「つきません」「あきません」と言わなければならないということは、ことばだけの説明ではなかなか身につかないものであるが、こうしたモノを使って指導するときは抵抗もなく、容易に会得できるのである。

## 5. 練習の場合

口頭表現練習では、表現すべき内容を絵・写真・スライドなどで示すことができる。授業が進むに従って、より複雑な内容の表現を要求するようになる。枚数を増やせばよい。この方法は、外国語で内容を与えて対訳的練習を行うのと違って、学習者各自の発想を表現に織り込むことができるのである。同じ目的で、絵や写真の代りに録音テープで音を聞かせる、表現練習をさせることもできる。聞かせるのは、ことばではなく、いわゆる効果音のようなものである。例えば、ドアをしめる音、廊下や歩道を靴で歩く音、下駄で歩く音、電話のベル、街の騒音、自動車・電車・ジェット機の発進音、バスやトラックの走る音、急ブレーキの音、駅のスピーカー、小鳥の鳴き声、雨の音、風の音、雷鳴などなど。これらを聞いて、なんの音、どんな場合の音などを言わせる。さらに、このうちのいくつかを



組み合わせせて聞かせ、それに基づいて話させる。または作文をさせる。こうすると、学習者の個性的な発想の違いで、種々の内容のものが得られる。これは発想を刺激することのできる練習である。

問答練習も、実物・絵・写真などを使って行えば、ことばだけの場合と違って、具体的な、実際的な問答が行われる。ことばによる想定に基づくのではなく、現実の場面を踏まえた、生きた問答が行われるのである。

学習者自身に選ばせた実物・絵・写真・絵葉書などを使って、自由に話をさせる。または作文に基づいて話させる。母国の写真、旅行の際の写真・絵葉書・みやげ物などがよく選ばれる。

日本の交通事情・車の渋滞・歩道橋・駅の放置自転車そのほか、現代日本の特徴的な風俗の写真などを示して、外国人から見ての感想・批判などを述べさせることもできる。作文を書かせるのもよい。

従来、教師と学習者は、それぞれ教科書を仲立ちとして問答を行ってきたが、視覚的手段を教授法に導入することによって、教師と学習者は、モノを仲立ちとして問答を行うようになり、実際の場面に即した、生きたことばによる学習が行われるようになる。中級以上の読解学習は別として、口頭言語能力の修得を目的とする授業では、提示であれ、練習であれ、つねに教師と学習者とが共有する場面に基づいて対話が行われなければならない。その場面を形づくるのに欠くことのできないのが視聴覚的手段であると考えられる。場面に基づく対話は、学習者の発想を刺激し、個性的な内容の表現を促すことになるのである。

## 6. 注意事項

(1) 視覚媒体は、その課の授業に最も効果的であると考えられるものを重点的に選んで使うべきである。多種多様のものを無計画に寄せ集めの状態で使えば、学習者の集注力は散漫になる。目先が変わって、見ていて飽きないということをねらいとしてはならない。ただし、ある方針に従って、地図・ポスター・列車時刻表・乗車券・写真・スケッチなどを系統的に順

序立てて使用するのはいい。

(2) 多種多様なものを集めるのではなく、同じ種類、同じ目的のものを多数用意する。一つのを、繰り返し使えば、刺激は弱くなり、効果は薄れてくる。ただし、一度使ったものは捨てないで整理・保存し、他の機会にまた使えるようにしておく。そして、新しいものを補充していく。他の教師と共有の財産とすることも賢明な方法である。

(3) 見せるだけではなく、学習者に使わせることが大切である。クラス中まんべんなく使わせるためにも、同種類のものを多数用意することが必要である。

(4) 授業の途中から使うものは、使うまで見せないでおく。使う前に教卓の上に並べておいては、いざ使うときに新鮮度を失う。使うまでは、バッグか箱の中に入れておく。きょうは、何が入っているかと、期待感を持たせるのがよい。

#### 参考文献

- 石田敏子 視聴覚資料の効果的利用 (『講座日本語教育』13) 1977 早大語研  
〔特集〕 日本語教育における視聴覚的方法 (『日本語教育』38) 1979 日本語教育学会
- 池尾スミ 場面的アプローチにおける〈場面ユニット〉の設定と表現のバリエーションのとりえ方
- 植松 清 映像—ことばの海への地図—
- 日向茂男 日本語教育映画基礎篇について—映像教材を考える—
- 齋藤修一 スライド「日本人の一生」
- 吉岡英幸 視聴覚教育の実例
- 安藤淑子 VTRを使用した授業報告
- 有馬俊子・石沢弘子 視聴覚教材の利用法—海外技術者研修協会の場合—
- 石田敏子 日本語教育におけるVTRの可能性 (『日本語教育』14) 1969
- 小林 勇 ビデオを使用した日本語教育について (『日本語と日本語教育』2) 1970 慶応義塾大学国際センター
- 佐久間勝彦 テレビドラマ使用による上級日本語教科書編集の試み (『日本語教育』39) 1979
- 村野良子 自作VTRの例—モナシニ大学の場合— (『日本語教育』40) 1980

- 木村宗男 聴解指導をめぐって(『講座日本語教育』5) 1969  
聴解指導の方法について(1), (2) (『日本語教育』15, 16) 1970, 1972
- 有光成徳・岸本唯博編(自作視聴覚教材の手びき) 1972 第一法規
- ① 『自作OHP教材の入門』
  - ② 『自作VTR教材の入門』
  - ③ 『自作スライド・8ミリ教材の入門』
- 田崎清忠・水野満ほか編『英語科視聴覚教育ハンドブック』1968 大修館
- 齋藤 明 視聴覚教材の利用によるはなしことばの指導(日本語教育指導参考書  
7『中・上級の教授法』) 1980 国立国語研究所
- 日本語教育学会『日本語教育事典』(1982刊行予定)
- 木村宗男 日本語教育における視覚教材の役割についての考察(『早稲田大学語  
学教育研究所紀要』6) 1967